

ので、閉鎖術施行し、十分な降圧療法下で経過良好である。後者は肺血管抵抗が 13.9 単位・ m^2 と高度の肺高血圧を示し、両方向シャントであったが、手術は行われなかった。肺血管抵抗の可逆性の判断が問題となった。

5) 心奇形を合併した新生児外科症例の検討

大沢 義弘・岩淵 真 (新潟大学付属病院
小児外科)

心奇形を合併する小児外科疾患の中で治療上問題となるのは食動閉鎖症や横隔膜ヘルニア等を主とする新生児外科疾患であり、その治療成績は不良である。そこで、これら新生児外科疾患につき検討し報告する。

昭和41年より61年までに経験した新生児外科症例は526例(死亡例97, 18%)で、心奇形を合併したものは38例(7%)であり、そのうち死亡は21例(55%)であった。

食道閉鎖症、横隔膜ヘルニアは各々44例、30例(死亡15例:34%, 13例:43%)で心奇形は18例、8例に合併し、そのうち11例(61%), 8例(100%)が死亡した。心臓手術は9例に行われ4例が死亡した。

6) 一地方病院小児心臓病診療からみた先天性疾患

竹内 衛・柳本 利夫 (国立療養所新潟病
塚野 真也・鈴木 幸雄 院 小児科)
東条 恵・小沢 寛二

昭和60年5月より同63年1月までの2年9箇月の間に当院小児心臓病科で診察した265例につき検討した。男134例、女131例で、年齢は新生児から44歳に及び、新生児から2歳、6歳、および12歳にピークが認められた。

疾患別では、先天性が89例(33.6%)、後天性が112例(42.3%)、その他が64例(24.1%)であった。先天性では心室中隔欠損が44例とその約半数を占め、この他では心房中隔欠損11例、肺動脈狭窄11例、フォロー四徴9例、動脈管開存8例などが頻度の高い疾患であった。これらの内、心臓カテーテル検査を、及び手術を要するものは、新潟大学医学部、および立川総合病院に紹介し、心臓カテーテル検査を受けたもの20例、手術を受けたもの10例であった。なお遠隔死亡は2例であった。また、新生児期に23例の受診があり、これは当科のミニ NICU(責任者 柳本)の影響が大であると考えられた。この他、アイゼンメンジャー症候群が3例にみられ、今後とも無視できない問題点であると考えられた。

後天性では川崎病が69例、不整脈が34例と多く、これに対して弁膜症は3例と少なかった。6歳と12歳とに年齢分布のピークをみているのは学童心臓検診のためと考

えられた。

地域的な先天性心疾患診療の向上のためには、専門医の充足も必要だが、それが可能となるまでは新生児科医や学童心臓検診への協力、病院間の連携等のシステムをより一層進めなければならない。小児循環器医の一層のサービスが必要である。

7) 心室中隔欠損症兼大動脈弁閉鎖不全症の手術と遠隔成績

今泉 恵次・金沢 宏 (新潟大学第二外科)
宮村 治男・江口 昭治

手術後10年以上経過した心室中隔欠損症兼大動脈弁閉鎖不全症37例について、大動脈弁の術式により症例を人工弁置換-AVR群、大動脈弁形成術-AVP群、無処理群に分け、その予後と現在の心機能を検討した。

結果 AVR群11症例、大部分初期の症例で使用弁種はS-E弁10例、B-S弁1例、4例手術死、3例脳塞栓死、2例事故死。生存2例(術後18年、19年経過)は塞栓の既往なくNYHA 1度である。

AVP群は19症例、3歳時AR III度例が4年後突然死した。再手術は3例、1例AR増強で1年後、2例がIEで13、14年後AVRとなった。残る15例は1例を除きARは改善し、生活制限はない。

無処理群7症例、術後11-21年を経てAR消失4例、I度1例、他2例は心雑音なく、最低血圧も正常域で、通常の日常生活を営んでいる。

結語 AVR群は初期の開心術補助手段の未熟さ、抗凝固療法の不徹底さなどにより成績不良であった。AVP、無処理群は、ほぼ満足な結果であったがIE発症には注意すべきである。

8) 高齢者における先天性心疾患症例の検討

片桐 幹夫・鈴木 万里 (立川総合病院心臓
山本 和男・中沢 聡 (血圧センター胸部
春谷 重孝・坂下 勲 外科)

当院における高齢者先天性心疾患手術症例を検討したので報告する。昭和44年から62年までの19年間の開心術症例総数は1293例で、先天性心疾患は633例(49.0%)であった。

30才以上症例は132例(20.9%)で、ASD 98例、VSD 12例、ECD 9例、PS 3例、その他10例で、平均年齢は44才、手術死亡は0であった。

最近6年間で高齢者手術症例が増加したが、これは主としてASD症例の増加に起因すると思われた。ASD